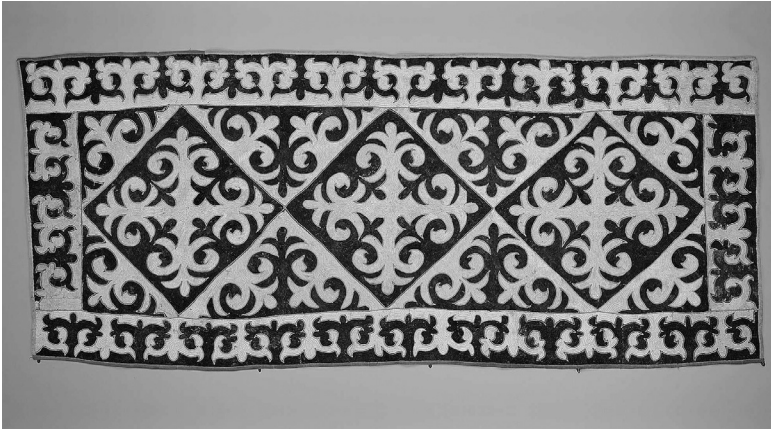


## 国立民族学博物館の収蔵品④

# 嫁入り道具



室内に敷かれているフェルト。1980年に結婚した女性の嫁入り道具だった。



カザフスタン村落部の家屋の室内（再現）



嫁入り道具をイメージして女性たちが作った、白鳥柄のクッション。

女性たちは展示資料も嫁入り道具をイメージして作ってくれた。このため、赤いビロードのクッションには、つがいとなって一生涯連れ添うといわれる白鳥のモチーフが刺繍されている。村の女性たちの思いがこもったこれらの資料は、その後、無事にみんぱくへと「お嫁入り」し、展示場をあざやかに彩っている。旧ソ連の解体と中央アジア諸国の独立という時代の変化を受けて、中央アジアの嫁入り道具は私たちにとって身近なものとなったのである。

（藤本透子）

今年の六月、中央・北アジア展示場は三十三年ぶりに大幅にリニューアルした。中央・北アジアとは聞きなれない言い方かもしれないが、中央アジア五カ国、モンゴル、シベリアをさしている。展示場が開設された一九七九年当時、これらの地域は社会主義体制下において、外国人が自由に調査することはできなかった。その後、ソ連解体などを経て日本人による長期調査も可能となり、現地の人たちから聞き取りしつつ新資料を収集できたのである。

例えば、「カザフ草原の暮らし」の展示では、村落部の家屋の室内を、村人たちに相談して再現した。女性が紅茶をいれ、男性は民族楽器のドムブラをかき鳴らし、子どもがそのそばで遊んでいる祝日の情景を再現したいと、親しくしている女性たちに話したところ、いくつかの家族から生活用品を提供してもらうことができた。

再現展示で床に敷かれた上質のフェルトは、一九八〇年に結婚した女性の嫁入り道具であった。この女性の母親が、大変な時間と労力をかけて作ってくれたという。まず、ひつじの毛を刈り、丁寧に洗って乾かし、圧縮してフェルトを作り、さらに文様にそって切ってから縫い合わせる。厳冬でも暖かいようフェルトは分厚く作るの、縫い合わせるだけでも大変な作業である。こうしてできたフェルトは、白と黒の羊毛が組み合わせられて、「雄ヒツジの角」と呼ばれる美しい文様が映える。客間に敷いて大切に使用していたが、村から街へ引っ越すことになり、街の家にはサイズが合わないという。そこで、「母が作ったフェルトの敷物が、多くの人に見てもらえるなら」と、遠い日本の博物館にゆだねてくれた。

こうした古いものばかりではない。色とりどりの刺繍とアップリケをほどこした壁掛けや座布団は、女性たちが新たに作った。何日も女性たちが縫い物にかかりきりになっていたので、たまたま訪れた近所の女性が「今度は誰が結婚するの？」と驚いて尋ねたほどだった。娘が嫁ぐ際には、親戚が総出で座布団やクッションなどを用意するため、